

平成17年度 新規研究課題について

センターでは、千葉県の水産業振興に役立つ試験・研究や指導普及を的確に推進するため、業界や県民の皆様からの研究要望(ニーズ)を、県庁内の各機関を通じて、あるいは各種研修会やホームページ等により収集しており、これら研究要望については、毎年、以下に掲げる複数の視点から分析・検討を行い、優先度の高い要望に対応する研究課題を設定しています。

このページでは、センターが新規に設定した研究課題について紹介いたします。

1. 技術的検討(5項目)
①:研究課題としての適格性(研究として取り組むべき課題かどうかの視点)
②:研究成果の波及効果等、想定される目標への影響度
③:既往知見の有無から見た研究課題化の妥当性
④:研究課題としての難易度及び達成可能性から見た妥当性
⑤:必要となる研究資源(予算や人員等)量から見た妥当性・効率性
2. 社会的検討(4項目)
①:受益者の規模や地域特性から見た重要性
②:問題点等の解決に求められる緊急性
③:千葉県水産総合研究センターが取り組む必要性
④:千葉県の行政施策から見た重要性

要望名	疾病防除のための紫外線照射海水飼育によるマダカアワビ種苗量産技術の開発
要望元	県庁・(業界)・その他
要望内容	漁業者からの生産要望が高いマダカアワビ種苗生産を事業化する上で、筋萎縮症の防除対策は、不可欠かつ早急に解決する必要がある課題である。
要望分析・検討時に重視した視点	1. 技術的検討(5項目)のうち ①② 2. 社会的検討(4項目)のうち ①②③④
総合判断(優先度)	マダカアワビ種苗生産の事業実施を図るうえで、早急に解決すべき課題である。
研究期間	平成17年～平成19年

要望名	のり高温品種作出に関する研究
要望元	県庁・(業界)・その他
要望内容	気象・海況の長期的な変動について、今後も現在の高水温化が続くものと推察され、現在の養殖用品種では、養殖の持続が困難になるものと考えられる。そのため、水温の上昇などの環境においても十分養殖可能なのり新品種の作出を図る必要がある。
要望分析・検討時に重視した視点	1. 技術的検討(5項目)のうち ①② 2. 社会的検討(4項目)のうち ①②③④
総合判断(優先度)	環境変動に対応した品種の開発は、のり養殖の将来を左右する分野であり、早期の対策が望まれる。研究開発による技術的貢献が期待できる。
研究期間	平成17年～平成21年

要望名	種苗生産における体色異常魚・異形魚の出現防止
要望元	(県庁) 業界・その他
要望内容	産地市場における価格決定の際に、ヒラメ体色異常魚の価格は正常魚の価格に比べて低くなっており、種苗放流事業の効果的な推進を図る支障となっている。 また、クロダイ・マコガレイにおいてもヒラメ同様の問題が想定されるばかりか、種苗放流後の生残にも影響があると予想されることから、早急に改善を図る必要がある。
要望分析・検討時に重視した視点	1. 技術的検討(5項目)のうち ①② 2. 社会的検討(4項目)のうち ①②③④
総合判断(優先度)	体色異常魚の出現防止に関する要望が強いヒラメについて、これまで未着手であった着底完了から放流の段階(全長30~80mm)の着色型黒化の防除技術開発を行う。
研究期間	平成18年~平成20年

要望名	人工魚礁漁場マップの作成
要望元	(県庁) 業界・その他
要望内容	人工魚礁の詳細な配置や魚礁への魚類蛸集状況に関する情報が不足している。 そこで、魚礁をより有効に利用し、今後の管理や計画策定時の検討に資するため、人工魚礁の配置及び魚類蛸集状況を調査して、人工魚礁漁場マップを作成する必要がある。
要望分析・検討時に重視した視点	1. 技術的検討(5項目)のうち ③④⑤ 2. 社会的検討(4項目)のうち ②③④
総合判断(優先度)	要望があるにも関わらず、これまで調査機器の制限から十分に対応できなかったが、機器が整備された新船により18年度から実施する。
研究期間	平成18年~平成21年

要望名	高品質の乾のり加工技術及び新製品開発に関する研究
要望元	県庁・(業界)・その他
要望内容	国内の産地間競争の他、海外からの輸出圧力によって、本県のり養殖経営はきびしくなることが予測される。 そこで、高品質の乾のり製造や新製品などによって付加価値の高い製品を生産し、のり養殖の経営の安定化を図る必要がある。
要望分析・検討時に重視した視点	1. 技術的検討(5項目)のうち ①②③ 2. 社会的検討(4項目)のうち ①②③④
総合判断(優先度)	これまであまり研究対象とされてこなかった領域であり、課題が達成された場合、乾のり品質向上等に寄与する可能性が高い。 乾のりの塩分量と保存性に関する研究を実施する。
研究期間	平成17年~平成18年

要望名	水産加工品の品質及び付加価値向上技術開発に関する研究
要望元	県庁・(業界)・その他
要望内容	本県水産加工業は製造が簡単な塩干・塩蔵品が主体で、零細な経営体が多くを占め、自らの開発力は高くないが、近年、国内他産地や国外製品からの脅威に曝されている。そこで、これに対抗するため、付加価値向上製品の作出や、簡便な品質管理法の開発が必要である。
要望分析・検討時に重視した視点	1. 技術的検討(5項目)のうち ①②③⑤ 2. 社会的検討(4項目)のうち ①②③④
総合判断(優先度)	水産加工業を支える技術開発を行うことは、地場産業振興につながることから優先度が高い。また水産加工業は、前浜資源の利用を担っていることから漁業振興にもつながる。
研究期間	平成17年～平成19年

要望名	本県水産物の付加価値向上を目指す鮮魚の鮮度保持技術の開発
要望元	県庁・(業界)・(その他)
要望内容	本県は首都圏に近接しており、流通時間が短く鮮度的に優位性があるものの、評価は必ずしも高くない。 その原因として、鮮魚の取扱いの問題があると言われていることから、産地における漁獲から出荷までの総合的な鮮魚取扱い方法、及び消費地市場や専門店における鮮魚の出荷方法並びに価格の実態調査を行い、必要な改善策を抽出することにより、現場で対応できる鮮度対策を策定する必要がある。
要望分析・検討時に重視した視点	1. 技術的検討(5項目)のうち ①②③⑤ 2. 社会的検討(4項目)のうち ①②③④
総合判断(優先度)	流通の現場に入った実態調査や流通技術研究は、これまで研究対象とされてこなかった領域である。大消費地圏での現状評価を調べ、これに基づき近隣他県・遠隔地に負けない千葉ブランド鮮魚の確立を目指すために最優先で実施されるべき課題である。
研究期間	平成18年～平成21年

要望名	アオサ食用化試験
要望元	(県庁)・業界・その他
要望内容	東京湾内湾海域のうち三番瀬、盤洲では、年により変動があるものの夏から秋にかけてアオサの堆積が見られ、その一部は腐敗し、漁業資源への影響が懸念されている。 現在、アオサに関しては、三番瀬を対象に発生量調査、アサリ餌料への利用等に関して基礎的な調査・研究が実施されており、それら知見をもとに、アオサの有効利用の実用化に向けた開発を進める必要がある。 具体的には「原料化試験」として、アオサを食材等原料として安定して提供するための保存方法等の開発や、「食用化試験」として、アオサの高付加価値化を目指した食用化等の利用方法の開発を行う必要がある。
要望分析・検討時に重視した視点	1. 技術的検討(5項目)のうち ①② 2. 社会的検討(4項目)のうち ①②③④
総合判断(優先度)	東京湾のアオサの処分方法については様々検討されてきており、今後バイオガス試験プラントへの供給、飼・肥料や食用も大きな用途の一つになる可能性がある。 ニワトリ用の飼料に向け、有効成分をいかした処理方法の検討により、新しい利用技術を開発する必要がある。
研究期間	平成17年

要望名	カタクチイワシの利活用に関する技術の開発
要望元	県庁・ 業界 ・ その他
要望内容	<p>カタクチイワシは、漁獲量が増加傾向にあるが、食用利用が少なく魚価が低迷している。</p> <p>加工事業者等の経営安定及び魚価向上による漁家経営の安定、並びに消費者においしく健康性機能を損なわない商材を提供することを目的として、このカタクチイワシをおいしく、安全に、またEPAやDHA等の機能性脂質を損なわないまま、鮮魚、刺身素材や水産加工品として提供する技術を開発する必要がある。</p>
要望分析・検討時に重視した視点	1. 技術的検討(5項目)のうち ①②③
	2. 社会的検討(4項目)のうち ①②③④
総合判断(優先度)	カタクチイワシは本県で最も多く漁獲されるが、魚価と関係事業者の経営が低迷しており、緊急に新たな食用用途開発が求められている。
研究期間	平成17年～平成22年

要望名	種苗放流以外の増殖方法に関する研究
要望元	県庁 ・業界・その他
要望内容	<p>第5種共同漁業権が設定される漁場においては、種苗放流等による増殖行為が義務づけられているが、コイについては、コイヘルペスウイルス(KHV)病の発生以降、まん延防止措置の観点から、緊急避難的措置としてKHVに感染していないことが確認された種苗以外の放流は自粛する措置を継続しており、自粛を解除する目処は立っていない。</p> <p>天然水域におけるKHV病対策については、国としての対策方針が現在も模索状況にあることから、疾病対策として実施する種苗放流の自粛と並行して、コイ資源の維持あるいは増大を図る手法の開発が必要である。</p>
要望分析・検討時に重視した視点	1. 技術的検討(5項目)のうち ①②③
	2. 社会的検討(4項目)のうち ①②③④
総合判断(優先度)	コイは、千葉県の内水面漁業において最も生産量の多い、重要な魚種の一つであり、この資源の維持増殖に係る本課題の優先度は高い。
研究期間	平成18年～平成20年